

実践報告

附属特別支援学校小学部の土曜日キッズサッカーの試み(Ⅱ) — キャリア教育の視点から —

畠山 富士雄* ・ 久野 建夫**

A Trial of the Kids Football On Saturday for An Attached Special Support
Elementary School for Children with Intellectual Disorders (Ⅱ)
— From a View Point of Career Education —

Fujio HATAKEYAMA* and Tateo KUNO**

【要旨】

本校小学部では、佐賀大学サッカー同好会「FC SUZUKA」の理解と支援を得て、2011年6月から年10回程度、土曜日にキッズサッカーを試行している。一方、本校では将来の豊かな社会生活の移行を目指したキャリア教育の研究を進め、児童生徒の変容とある程度の成果が見られている。

そこで、2012年度はキャリア教育の視点からキッズサッカーを試行し、参加児童の技能向上と意欲の高まりが見られている。本稿では、その経過について報告する。

【キーワード】

知的障害児、余暇活動、キャリア教育、週休日、QOL

1 はじめに

2011年度からの本校小学部のキッズサッカーの取り組みについて、著者らは効果的な指導や内容、工夫について検討した(畠山・久野, 2011; 畠山・久野, 2012)。さらに、参加児童がキッズサッカーを楽しんだりパスやシュートの技能が向上したりしていること、その変容を大学生と保護者が好意的に感じていることを報告した(畠山・久野, 2012)。

一方、畠山は2012年度高等部生徒を担当し、高等部卒業後の一般就労や福祉就労等を目指し、教育課程の作業学習や校内・現場実習、数学、家庭科等に携わり、生徒と共に高等部の卒業後の生活を間近なこととして実感している。また、本校は2009年度から4年間、「キャリア教育およびキャリア発達」をキーワードに研究に取り組んできていて、一定の成果をあげている(久野ら, 2012)。

キッズサッカーとキャリア教育との関連をみたとき、広い意味でのキャリア教育とは、「学校教育・家庭教育・学校外の地域教育」の3つの柱から構成されるとしている(松矢, 2010)。「学校外の地域教育」とは、放課後活動や青年・成人期の生涯教育が含まれるとされる。このことから、「学校外の地域教育」のキッズサッカーの向上は、キャリア教育の充実に結びつくと考えられる。

しかし、2012年度で2年目となるキッズサッカーは日も浅く、これまでは実施することに主眼を置いてきた。そのため、児童がいずれ高等部を卒業し社会生活を営むという長期的視野から取り組みを振り返ったり、また、本校の教育課程で一定の成果を得ているキャリア教育の視点からキッズサッカーを見直したりできれば、キッズサッカーの成果を一層高めることができると考えた。

*佐賀大学文化教育学部附属特別支援学校

**佐賀大学文化教育学部

以下、2012年の取り組みと今後の在り方を検討する。

II 目的

- 1 キッズサッカーに関するキャリア発達段階と内容を明確化する。
- 2 「キッズサッカーにおけるキャリア教育のねらい一覧表（案）」（以下、「ねらい一覧表」と称す）を作成する。
- 3 キャリア教育の視点からキッズサッカーを実施し、児童の変容を明らかにする。
- 4 キャリア教育の視点や発達障害児のキッズサッカーにおける不器用さ・困難さを明らかにし、支援内容を検討する。

III 方法

本研究では、キャリア教育の視点を次のように取り入れ、キッズサッカーを実施した。

- 1 キッズサッカーに関するキャリア発達段階と内容を明らかにする。
- 2 1をもとに、「ねらい一覧表」を作成する。これにより、各児童のめあてを定める。
- 3 2012年度のキッズサッカーの内容は、当初は2011年度を踏襲し、随時、PDCAサイクルで見直しを図り実施する。
- 4 キャリア教育の視点や発達障害児のキッズサッカーにおける不器用さ・困難さを明らかにし、支援内容を検討し見直しを図る。
- 5 児童の変容を、「ねらい一覧表」や観察、記録により明らかにする。
- 6 キャリア発達の視点で、大学生と保護者にアンケートをとり、変容を確認する。

IV 結果

- 1 キッズサッカーに関するキャリア発達段階と内容を明確化する（目的1）
 - ① キャリア教育・キャリア発達について
我が国において「キャリア教育」という文言が公的に初めて登場したのは、平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教

育と高等教育との接続の改善について」においてである。

その定義はこれまで変遷があるものの、文部科学省は平成23年1月31日中央教育審議会答申で、「一人一人の社会的・職業的自立の向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」としている。キャリア発達の定義についても、『社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現して行く課程を「キャリア発達」という』としている。

なお、平成23年以前からキャリア発達に関わり、Table 1の「4領域8能力」が示されていた。

Table 1 キャリア発達に係る「4領域8能力」

「4領域8能力」の内容	
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。
【自他の理解能力】	自己理解を深め、他者の多様な個性を尊重し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
【コミュニケーション能力】	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。
【情報収集・探索能力】	進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し自己の進路や生き方を考えていく能力
【職業理解能力】	様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。
【役割把握・認識能力】	生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
【計画実行能力】	目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力
意志決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択、決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。
【選択能力】	様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
【課題解決能力】	意志決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自らの課題を設定してその解決に取り組む能力

（文部科学省，2011，「高等学校キャリア教育の手引」より）

その一方で、文部科学省（2011）によれば、「4領域8能力」は、(ア)高等学校までの想定にとどまっていた、社会人との共通言語になっていない、(イ)学校現場で固定的に捉えられている場合が多い、(ウ)十分理解されないで「〇〇能力」という語感や印象に依拠した実践が散見される、とされた。

そこで新たに、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として「基礎的・汎用的能力」が提示された。「基礎的・汎用的能力」の具体的内容は、Table 2の通りである。

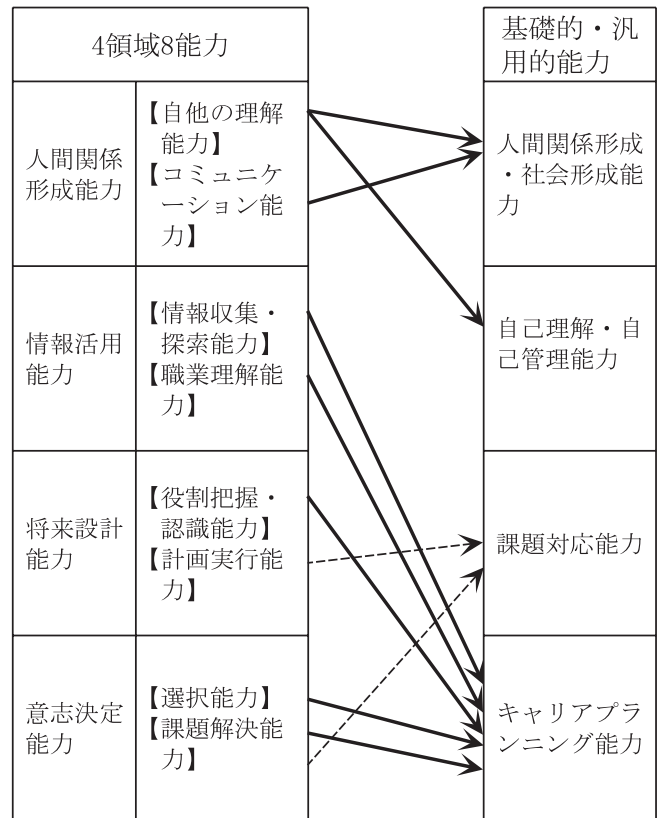
Table 2 「基礎的・汎用的能力」の4能力の内容

「基礎的・汎用的能力」の4能力の内容	
人間関係・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて、自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決ができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切取捨選択しながら、社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる力

（文部科学省，2011，「高等学校キャリア教育の手引き」より）

次に、「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」の関係はTable 3のとおりである（文部科学省，2011）。

Table 3 4領域と基礎的・汎用的能力の関係



※ 「図中の破線は、両者の能力の関連性が相対的に弱い」とされている。

Table 3 の「4領域8能力」が示された時には、「基礎的・汎用的能力」の「課題対応能力」「自己管理」も含め十分前面に出されてこなかったこともあり、この点を踏まえた実践の改善が求められるとされた（文部科学省，2011）。

これらの点を踏まえながらも、本研究ではこれまでの「4領域8能力」を背景に、特別支援教育においては、後述する菊地（2011）の「4領域」を焦点化して研究を進めることとした。その理由として、次の3項目がある。

- (a) 「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」は共通する要素が多く、どちらを当面の直接的な資料とするかは学校等の判断によるとされる（文部科学省，2011）。
- (b) 「基礎的・汎用的能力」の内容と提唱の理由を十分に踏まえ、将来の転換を視野にキャリア教育の取組の改善を図っていける（文部科学省，2011）。

(c) 小学部段階では、まず「課題対応能力」「自己管理」の基礎的・基本的となるキャリア教育の充実が必要であり、「4領域8能力」の視点で十分対応できると考えられる。

② キッズサッカーと「4領域」の関連する項目の明確化について

特別支援教育に関する「4領域」については、『知的障害のある児童生徒のキャリアプランニング・マトリックス（試案）（国立特別支援教育総合研究所，2010）』において、職業的（進路）発達にかかわる諸能力として、キャリア発達の段階について、小学部（小学校）、中学部（中学校）、高等部の3段階が設定されている（菊地，2011）。

それを参考に、「4領域」の小・中学部、高等部の発達段階とキッズサッカーの関連を検討した。なお、Table 4～Table 7の記載分は、キッズサッカーに関連すると考えられる項目のみ著者が抜粋したものである。

まず、Table 4の「人間関係形成能力」では、キッズサッカーのねらいとして、当日の児童の担当大学生は必ずしも固定されてはいないが、その時々支援の大学生と良好な人間関係を築き、支援を素直に聞き入れて活動できること、他の児童のよさも認めて仲良く活動できること、挨拶をきちんとしたり協力したりして、集団に参加できることが考えられる。

そのことが、中学部や高等部の「人間関係形成能力」を通して、将来の社会・職業生活への参加や求められる役割を果たすことにつながると考えられる。

Table 4 「人間関係形成能力」について

1 人間関係形成能力		
小学部段階	中学部段階	高等部段階
○人とのかかわり ●自分の良さへの気づき	○自己理解・他者理解 ●達成感に基づく肯定的な自己理	○自己理解・他者理解 ●職業との関係における自己理解、

●友達の良いの気づき ○集団参加 ●大人や友達とのやりとりと集団活動への参加	解、相手の気持ちや考え、立場の理解 ○協力・共同 ●集団における役割の理解と協力	他者の考えや個性の尊重 ○協力・共同 ●集団（チーム）の一員としての役割遂行
○挨拶・清潔・身だしなみ ●挨拶、身だしなみの習慣化	○場に応じた言動 ●状況に応じた言葉遣いや振る舞い	○場に応じた言動 ●TPOに応じた言動

Table 5の「情報活用能力」では、キッズサッカーのねらいとして、キッズサッカーや大学生に興味を持ち、ルールを理解し、期待される役割と活動を行うことが求められる。

そのことが、中学部や高等部の「情報活用能力」を通して、将来の社会・職業生活について具体的に理解して参加し、社会資源や様々なサービスを活用して、自分の役割も果たすことにつながると考えられる。

Table 5 「情報活用能力」について

2 情報活用能力		
小学部段階	中学部段階	高等部段階
○様々な情報への関心 ●仕事、働く人など身の回りの様々な環境への関心 ○社会資源の活用とマナー ●地域社会資源の活用と身近なきまり	○情報収集と活用 ●進路をはじめ様々な情報の収集と活用 ○社会資源の活用とマナー ●社会の仕組み・ルールの理解	○情報収集と活用 ●職業生活・社会生活に必要な事柄の往訪収集と活用重 ●法や制度の活用 ○社会資源の活用とマナー ●社会の様々な制度やサービスに関する理解と実際生活での利用

Table 6の「将来設計能力」では、キッズサッカーのねらいとして、全体の活動や自分に求められる役割を知り、周囲の人々を見たり一緒に活動することでよりよい活動のイメージを持ち活動すること、楽しさを味わうことが求められる。

そのことが、中学部や高等部の「将来設計能力」を通して、将来の社会・職業生活に見通しをもち、求められる習慣を形成したり、やりがいや生きがいのある職業や余暇につながると考えられる。

Table 6 「将来設計能力」について

3 将来設計能力		
小学部段階	中学部段階	高等部段階
○夢や希望 ●職業的な役割モデルへの関心	○夢や希望 ●将来の夢や職業への憧れ	○夢や希望 ●働く生活を中心とした新しい生活への期待
○やりがい ●意欲的な活動への取組	○生きがい・やりがい ●様々な学習活動への自発的な取組	○生きがい・やりがい ●職業の意義の実感と将来設計に基づいた余暇の活用

Table 7の「意志決定能力」では、キッズサッカーのねらいとして、ミニゲームで自分の好きなポジションを選んだり、状況を見て攻守を判断し参加できること、自分の意志や判断を周囲の人々に伝えること、集中して最後まで活動できることなどが望まれる。また、振り返りの中で、次回の期待感や見通しをもてることが考えられる。

そのことが、中学部や高等部の「意志決定能力」を通して、将来の社会・職業生活に具体的目標を設定し、よりよい将来設計や進路を自己責任で選択し、振り返ることによって向上できることにつながると考えられる。

Table 7 意思決定能力について

4 意思決定能力		
小学部段階	中学部段階	高等部段階
○目標設定 ●目標への意識、意欲	○目標設定 ●目標の設定と達成への取組	○目標設定 ●将来設計や進路希望の実現を目指した目標の設定とその解決への取組
○自己選択 ●遊び、活動の選択	○自己選択(決定・責任) ●自己の個性・関心に基づいたよりよい選択	○自己選択(決定・責任) ●働く生活を中心とした新しい生活への期待

2 「キッズサッカーにおけるキャリア教育のねらい一覧表(案)」を作成する(目的2)

前述1と東京都教育委員会の報告書(2008)を参考に、Table 10のとおり「キッズサッカーでのキャリア教育のねらい一覧表(案)」(以下、「ねらい一覧表」と称す)を作成した。

これは、小学部段階での「4領域」に関わ

る能力を考慮したもので、キッズサッカー当日の準備から振り返りの活動までを含み、実施後の評価にも使用できた。

以下、キッズサッカーでの実践を述べる。

3 キャリア教育の視点からキッズサッカーを実施し、児童の変容を明らかにする(目的3)

① 対象児は次の8名である。

Table 8 対象児

学年	1	2	3	4	5	6
人数(名)	0	3	1	1	1	2

② 指導方針

(ア) キッズサッカーの運営と実施は、保護者主催とした。

(イ) 2011年度の「安全」「楽しさ」「個別支援」の3つのキーワードは継続し、キャリア教育の視点を取り入れてキッズサッカーを実施した。

(ウ) 実施方法

2012年度の実施回数、実施時間は、2011年度と同様で、月1回、毎回1時間程度とした。2012年度当初のスケジュールも、2011年度と同様とした。

③ 取り組みの日時、参加児童、主な内容

2012年のキッズサッカーの実施状況は、Table 8の表の通りである。2011年と比較して、ほぼ同様の開催ペースであった。

Table 9 2012年度キッズサッカーの取組状況

回	日時	参加児童数	内容
1	6月23日(土) 10:00~11:10	本校児童6人 きょうだい4名	ゲームと個別練習
2	7月7日(土) 10:00~11:00	本校児童4人 きょうだい2名	ゲームと個別練習
3	9月15日(土) 10:40~11:25	本校児童6人 きょうだい1名	ゲームと個別練習
4	10月13日(土) 10:30~11:30	本校児童5人 きょうだい4名	ゲームと個別練習
5	11月10日(土) 10:00~11:00	本校児童4人 きょうだい2名	ゲームと個別練習
6	12月15日(土) 10:40~11:30	本校児童1人 きょうだい1名	ゲーム

Table 10 キッズサッカーでのキャリア教育のねらい一覧表（案）

キッズサッカーの活動	キャリア教育としてのねらい〈キャリア発達領域〉
1 自分の持ち物整理、着替え、排泄をする。	<p>〈意志決定能力〉</p> <p>D 1 自分のことは自分でしようとする。</p>
2 大学生や家族以外の保護者、児童に挨拶したり会話をする。	<p>〈人間関係形成能力〉</p> <p>A 1 挨拶や返事、会話をする。</p> <p>〈情報活用能力〉</p> <p>B 1 キッズサッカーの見通しを持ち、落ち着いて活動する。</p>
3 事前の準備や体慣らしにボールで遊ぶ。	<p>〈意志決定能力〉</p> <p>D 2 自分のことは自分でしようとする。</p>
4 キッズサッカーをする。	<p>〈人間関係形成能力〉</p> <p>A 2 活動のやりとりを通して、大学生をより身近に感じる。</p> <p>A 3 他の児童と協力してキッズサッカーの活動に取り組む。</p> <p>A 4 他の児童や大学生と楽しく遊ぶ。</p> <p>A 5 自分らしさを発揮してのびのびと活動する。</p> <p>〈情報活用能力〉</p> <p>B 2 大学生の支援者の様子が分かり、キッズサッカーに興味関心をもつ</p> <p>B 3 他の児童と協力して、相手のチームと対戦する。</p> <p>B 4 自分の役割を理解しやり遂げる。</p> <p>B 5 自分に任せられた役割を、意欲的に行う。</p> <p>B 6 具体的なゲーム運びや技能などの方法や大切さを知る。</p> <p>B 7 キッズサッカーでの他の児童や大学生の活動をしる。</p> <p>〈将来設計能力〉</p> <p>C 1 自分の活動や役割を理解し、やり遂げる。</p> <p>C 2 キッズサッカーのいろいろな役割を知り、自分の役割をはたす。</p> <p>C 3 決められた時間や決まりを守り、活動の手順が分かる。</p> <p>C 4 活動の順序が分かり活動できる。</p> <p>C 5 ミニゲームを体験する。</p> <p>C 6 上級生やきょうだい児、大学生が取り組んでいる姿をみたり一緒に体験することで、近い将来の活動についてのイメージをもつ。</p> <p>C 7 学校と違う環境で活動することに慣れる。</p> <p>〈意志決定能力〉</p> <p>D 3 活動の手順を覚え集中して活動する。</p> <p>D 4 誰と同じチームとなるか考えたり、ゼッケンの色を選んだりする。</p> <p>D 5 好きなチームや色を選び、支援者や大学生、保護者に伝える。</p> <p>D 6 自分の役割を最後までやり通そうとする。</p> <p>D 7 自分の好きなポジションを選んだり、攻守を選んだりする。</p>
5 活動を振り返る。 ・ 次回の確認 ・ 終わりのあいさつ	<p>〈人間関係形成能力〉</p> <p>A 6 活動を振り返り、頑張ったことを発表する。</p> <p>A 7 支援者や大学生、保護者の発表を聞き、他の児童の頑張りを認める。</p> <p>A 8 活動での自分の役割を理解し、他者と協力して活動に取り組む。</p> <p>〈将来設計能力〉</p> <p>C 8 キッズサッカーの後始末をする。</p> <p>〈意志決定能力〉</p> <p>D 8 次回の活動を聞き、期待感や見通しをもつ。</p> <p>D 9 自分の活動を振り返り、次回につなげていこうと考える。</p>

平成21年3月 東京都教育委員会 「平成20年度 障害のある児童・生徒の自立と社会参加を目指した指導の研究・開発事業（キャリア教育推進委員会）報告書P10～20を参考

④ 参加児童の変容について

(ア) A児の変容について



Fig. 1 攻守の要のA児



Fig. 2 常にボールを追う



Fig. 3 常に前へ進む



Fig. 4 常にゴール向かう

参加児童の中でも一番技能が高い児童Aは、キッズサッカーでのキャリア教育の「ねらい一覧表」を、技能や態度の両面でほぼ達成できていた。

特記すべきことは、一覧表の「将来設計能力」の中の「C1 学校と違う環境で活動することになれる」で、唯一本校以外でもサッカーの活動ができていた。具体的には、2012年からプロサッカーチームのサッカースクールに木曜日1時間参加したり、S市内小学校で健常児のサッカーチームの練習に月・水・土曜日の1時間30分間、参加したりしていた。

ただ、2カ所の状況は少し異なっていた。サッカースクールでは、コーチの一人に発達障害について詳しい方がいるため周囲に配慮を働きかけてあるため、A児は精神的に安定して活動できている様子だった。一方、小学校のサッカーチームでは他の児童の言動が気になることもあるらしいが、「サッカーが大好き」という気持ちが優っていて、小学校では健常児といろいろな事があっても、サッカーを楽しみにしているとのことだった。

課題としては、「人間関係形成能力」に

おいて、ゲームになると大人のアドバイスが伝わりにくかったり、周囲の状況が把握できず児童にパスをすることが十分できなかったりすることがあった。

母親は、A児のこのような不得意な状況を理解していたので、本校では周囲の児童にパスをするように、A児によく声かけをしてあった。その声かけについては、A児は「わかった」と返事ができたり、「周りがやっぱり見えない」と言ったりしながらも、母親の働きかけに反応できていた。

成果としてこれまでを振り返ると、2011年度からの本校での大学生との体験が、キャリア教育での「情報活用能力」の社会資源の活用や、「将来設計能力」の夢や希望、生きがいややりがいを持てる状況につながったと感じた。2011年当初は予想もできなかった新しい2カ所でのサッカーでも、A児は意欲と適応力を見せてくれていた。

また、A児は、参加児童の中で唯一「基礎的・汎用的能力」の「課題対応能力」レベルにいると考えられた。予想できなかった健常児とのサッカー教室やサッカーチームを同時に体験でき、発達障害の特性がある中でも立派に活動ができていた。

A児の事例は、キャリア教育の観点から称賛すべき、また参考になる出来事と考える。特に、「課題対応能力」のレベルも体験できていて、健常児との困難を伴う事柄も自身で解決できる力をA児は身につけたと感じる。今後、キッズサッカーにおいても、一層リーダー的役割が担えると考えられる。

(イ) B児の変容について



Fig. 5 常に意欲的なB児



Fig. 6 常に参加



Fig. 7 大学生に挑戦



Fig. 8 味方のフォロー

「ミニゲーム参加児童」グループのB児は、これまで、2010年度に入学したサッカー好きなA児と一緒にボール運動をすることが多かった。特に2年前から走る姿勢が良くなり、キッズサッカーでもドリブルやシュートの技能が向上していた。ミニゲームでは、積極さと同時に安全なプレーを心がけ、常にボールを追って他の児童と一緒にミニゲームを楽しんでいた。また、ミニゲームでは、自分のチームの状況を把握し、守備重視の時にはゴールキーパーも率先してできていた。

キャリア教育の観点からは、キャリア教育の「ねらい一覧表」をほぼ達成していた。課題としては、自分から話しかけないで黙って活動しやすいので、「人間関係形成能力」では大学生に積極的に「A1 挨拶や返事、会話をする」、また、「A6 活動を振り返り、頑張ったことを発表する」ことで、自分の意志や思いをさらにはっきり伝えることができるようになって感じた。

(ウ) C児の変容について



Fig. 9 ミニゴールで練習



Fig. 10 ドリブルの練習

C児は「個別練習児童」グループから「ミニゲーム参加児童」グループへ移動できた唯一の児童である。

キッズサッカーへの参加当初は、支援者と2人でパスの練習はできても、サッカーのルールが理解できずボールを手で触ったり、ミニゲームに誘われても相手チームとの対戦方法が分からずに、サッカーコートからすぐに出てしまっていた。

そこで、母親の要望で技能向上とルールの理解を深めるため、はじめは個別指導を重視し、ミニゴールにシュートしたり、ドリブルを練習したりした。参加回数が増す毎に、ミニゲームに参加できる機会も見られ、活動を楽しめるようになった。



Fig. 11 ボールをキープ



Fig. 12 ゴールにシュート

2学期からはサッカーのルールも徐々に理解でき、ミニゲームに最後まで参加できるようになった。Fig. 11~12のように、ボールをキープできたり、相手のゴールに時々シュートしたりできるようにもなった。

また、C児は「めあて一覧表」を見ても、「4領域」の項目に変容が大きく見られた児童であった。

例えば、「人間関係形成能力」では、S園子ども発達医療センターでの言語指導の成果が見られ、コミュニケーション能力が向上し、意思表示が得意やすくなった。「A4 他の児童や大学生と楽しく遊ぶ」ことや、「A5 自分らしさを発揮してのびのびと活動する」する姿勢が見られた。

次第にルールが理解できることで、ミニゲームでは2チームの区別が分かり、ボールを追えるようになって、楽しくのびのびと活動できた（「A2~A5、A8」を達成）。

「情報活用能力」では、キッズサッカーの様子が分かり、相手のチームと対戦し、

具体的なゲーム運びも徐々に理解していった(「B1～B7」の全部をほぼ達成)。

「将来設計能力」でも、一緒に活動することで活動の順序が分かり、ミニゲームのゲーム運びのイメージをもつことができた(「C1～C8」の全部をほぼ達成)。

「意志決定能力」では、自分の意志を相手に伝えることはまだ十分出来にくい時もあるが、キッズサッカーの活動手順を覚えることで集中して活動したり、自分の役割をやり通すことができたりした(「D1～D3、D6～D7」はほぼ達成)。

C児にとっては、キッズサッカーの技能とコミュニケーション能力が向上できたことで、「めあて一覧表」の項目の多くが達成できるようになった。

(エ) D児の変容について



Fig. 13 級友と楽しく活動 Fig. 14 一人でゴール可能

「個別練習グループ」のD児は、2年目は特に表情が豊かになり、きょうだい児が参加しているミニゲームと一緒に参加して走り回ってゲームの雰囲気を楽しんだり、大学生と保護者の大人2名の支援から自分一人でミニゴールにシュートすることが可能になったりした児童である。

2011年度当初は、D児はボールを蹴ろうとしないで手でボールを触ったり、大人2人の支援を受けミニゴールにシュートをしたりしていた。活動時間も10分程度と短かく、「めあて一覧表」32項目の中で、達成できていると考えられるのは「人間関係形成能力」の「A4 他の児童や大学生と楽しく遊ぶ」、「A5 自分らしさを発揮してのびのびと活動する」などであった。

しかし、2012年度は1人でボールをゴールに蹴ることが多くなったり、ミニゲーム中に参加してサッカーコートを楽しく走り回ったりする場面が増えた。さらに、準備運動のラジオ体操でも意欲的にみんなの前に出て模倣する場面があり、「将来設計能力」の「C4 活動の順序が分かり活動する」、「C5 ミニゲームを体験する」の発端が見え始めていた。

C児もキッズサッカーの技能が向上し、キャリア教育と係わるめあての達成項目が増えていた。変容しているC児にとっては、さらなるサッカー技能の向上で達成項目も増加すると期待できた。

(オ) E児の変容について



Fig. 15 納得するまで会話 Fig. 16 一人でゴール

日常会話が可能なE児は「個別支援児童」グループに所属していた。当初はD児と同様に、集中して取り組める時間が約10分間程度で、時々活動を中断して近くの遊具に行こうとする時があった。しかし、回を重ねる毎に、技能的には一人でミニゴールにシュートできる機会が増え、ミニゲームに参加する場面も見られた。

キャリア教育の「ねらい一覧表」の32項目の中で達成できていると考えられる項目は、「人間関係形成能力」の「A1 挨拶や返事、会話をする」、「A2 活動のやりとりを通して、大学生をより身近に感じる」、「A4 他の児童や大学生と楽しく遊ぶ」、「A5 自分らしさを発揮してのびのびと活動する」などと、考えられた。

時々最後まで活動に集中できないE児は、Fig. 15のように大学生から活動の継続を働

きかけられることがあった。しかし、この両者のやりとりの場面は、「人間関係形成能力」の「A2 活動のやりとりを通して、大学生をより身近に感じる」や、「情報活用能力」の「B4 自分の役割を理解しやり遂げる」、「B5 自分に任せられた役割を、意欲的に行う」などにつながる活動と考えられた。大学生とコミュニケーションを図れることで、E児は大学生をより身近に感じて楽しく活動したり、自分の求められている活動を知り、手順が分かって最後までやり遂げようとしたりすることにつながる過程であると、「めあて一覧表」から再認識できた。大学生の支援が納得できれば、E児は再び Fig. 15のように取り組むことができた。

今後、E児にとって技能がさらに向上することができれば、さらなるキャリア発達に結びつくと考えられた。

以上、5名の児童の取組と変容を見てきた。全体的にキッズサッカーの技能の向上は向上し、「めあて一覧表」の達成項目も増えた。この両者は正の相関に近いと実感できた。

4 キャリア教育の視点や発達障害児のキッズサッカーにおける不器用さ・困難さを明らかにし、支援内容を検討する（目的4）

① キャリア教育の視点からの見直し

キッズサッカーの実践と並行して、キャリア教育の「ねらい一覧表」、毎回実施後の保護者や学生のアンケートをもとに、PDCAサイクルで2年目の活動を改善した。その内容は、次のとおりである。

(ア) キッズサッカーに関する知見と当日のめあてを保護者と共有化

保護者に、毎回、A4の1枚の資料を配付した。表面にはキッズサッカーに関する情報や知見を記載した。裏面には参加児童の「II 本日でできそうなめあて」の

技能2項目（①自分でボールを止め、蹴り返す）や態度1項目（①楽しく活動できた）を4段階（①十分満足～④不満）で保護者が評価できる項目、「IV 保護者の願い」、「V 学生さんとの打合せ」、「VI 本人への働きかけ（○てだて、○声かけ、○その他）」や「VII 本日の変容」の欄を設け、その都度保護者に記入してもらった。

その結果、保護者へは特殊教育学会や他県のサッカーの例などの情報を提供できたり、各児童への働きかけや変容を共有できたりした。

(イ) 時間厳守と大学生への感謝のこもった挨拶

就労や高等部での実習、また、社会生活等でも時間を守ることは、はっきりと挨拶をすることなどは基本として求められる。そこで、まず10:30～11:30の開始と終了の時間を、児童が守れるように保護者に依頼した。児童には、大学生は自分たちの練習時間を割いて支援されている事を機会ある毎に説明した。その結果、きょうだい児も含め、心のこもった挨拶ができるようになった。

(ウ) ミニゲームでの事前のグループ練習

2012年度は、保護者の要望を取り入れ、ミニゲーム前にグループ練習を行うようにした。ミニゲームに参加する児童の中には、ドリブルやパスの技能で個人差が見られた。そのため、2チームに分かれ10分程度パスやシュート練習を取り入れ、技能の向上を図った。その結果、大学生も個々の児童の実態把握と支援のポイントが分かり、ミニゲーム時の支援にも生かされていた。

(エ) 評価のためのドリブル時間の測定

児童の技能を数的に把握し変容を知るため、25mのドリブル計時を行った。活動時間の都合で毎回実施できなかった

が、参加児童のドリブルの状況や課題が把握できた。

- (オ) 全員がゲームに参加し楽しさを感じる
 全員の保護者と願いを共有するため、個別練習グループ3名も、毎回、ミニゲームに参加する機会を設けるようにした。しだいに3名はゴールキーパーやドリブル、シュートに一部参加し、ゲームの雰囲気を楽しむことが可能になっていた。

(カ) 後始末の実施

2012年度は、毎回参加児童で毎回後始末を行った。回を重ねる毎に、後始末の時間が縮まった。

- ② 自閉症児の運動の不器用さからの見直し
 キッズサッカーは、キャリア教育の目的を達成するための1つの手段と考えられる。その技能が向上し活動中の態度が変容することで、「めあて一覧」の達成項目が増えていた。しかし、自閉症児は、一般に不器用と言われる運動の困難さが指摘され、健常児よりも「めあて一覧表」の達成に困難さや個人差が見られることが予想される。

本校においても、「ミニゲーム参加児童」グループよりも「個別指導児童」グループの方が、運動面での困難さを感じている。そこで、自閉症児の運動の不器用さを明らかにして、キッズサッカーを見直すことにした。

先行研究では、例えば山下ら(2010)は、大阪のA高等専修学校に在籍する発達障害の診断もしくは疑いのある生徒60名に質問紙法もしくは構造化面接法により、本人がスポーツにおいてどのような困難・ニーズをもっているのかを調査している。サッカーについての結果は、Table 11の通りであった。表によると、サッカーの課題として、「体の動き、姿勢、視野、バランス、体の左右の調整に困難がみられる」として、「セラピーボールなどの大きいボールを使っ

て視野を広げさせるなどの教材の工夫も求められる」としている。

なお、本研究の37.5%は、概ね「ミニゲーム参加児童」5名は全項目を達成し、「個別指導児童」3名は全項目を達成していないとして数値を算出している。

Table 11 サッカーに関する困難・ニーズの内容

サッカーに関する困難・ニーズの内容	割合 (%)	本研究 (%)
速度を絶えず変えて走るのが苦手なので、自分のペースで走りたい。	38.3	37.5
ボールに届くために飛び上がることが苦手なので、ボールが地面に落ちるまで待つてほしい。	38.3	37.5
足を使ってその場にあるボールを蹴っても自分の思い通りのところにいかないの、味方にフォローしてほしい。	38.3	37.5
ボールが宙に上がったときボールの落下地点を予測することができないので、どこに走ったらよいか指示してほしい。	38.3	37.5
コートを走ったり、相手の選手を見たり、ボールを追ったりするときに終始姿勢を変えることが苦手なので、自分の楽な姿勢でいたい。	35.0	37.5
ヘディングのジャンプするタイミングがわからないので、味方にいつ飛べばよいか教えてもらいたい。	33.3	37.5
自分の位置とゴールとの距離を読み誤ってしまうためシュートが届かないので、ゴールの近くでシュートさせてほしい。	31.7	37.5
蹴る動作のタイミングを正しく図ることができないので、じっくり蹴らせてほしい。	30.0	37.5
転がってくるボールを蹴ることができないので、一回止めてから蹴りたい。	30.0	37.5

(山下ら, 2010)

山下らは、全体的に3割~4割弱の発達障害の生徒にサッカーに関する困難・ニーズがあるとしている。また、岩永(2010)は、プラクシスやバランス運動に問題をもったASD児は多いが、走る、高いところから跳ぶなど比較的単純な運動は得意なASD児がいると指摘している。以上のことから、通常のサッカーやそのルールと異なり、自閉症児の特性を考慮した工夫が必要と考えた。

そこで、本校のキッズサッカーでは、ヘディングする場面はほとんどなく、ゴールを小さくしてシュートする距離が短くし、

味方のチームは2~6名程度と少ないので自分のペースと判断で攻守の切り替えができ、大学生から常に支援を受けることができるようにしてきた。最終的には、シンプルに、ドリブルで相手コートにボールを運びシュートするという形態に落ち着いた。

5 大学生や保護者のアンケート結果について サッカーチームの大学生10名（2012年12月15日）、保護者7名（2012年12月17日~21日）にアンケートを実施した。その結果は、次のグラフと表の通りである。

① 大学生10名の支援回数と児童8名の参加回数

2012年度は6回キッズサッカーを開催できた。今回、回答した大学生10名中9名が支援機会があり、支援回数は1~3回で8割を占めた。比較的、偏ることなくどの学生にも支援をしてもらったと考えられる。

一方、7名の児童は1~5回の参加状況がほとんどで、参加状況にやや個人差が見られた。

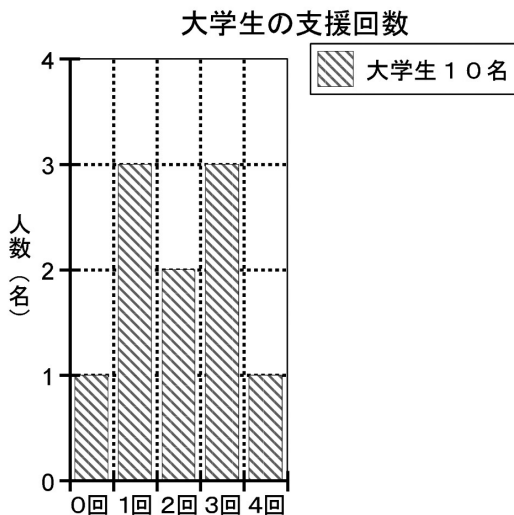


Fig. 17 大学生の支援回数

② キッズサッカーは将来何に役立つか

キッズサッカーが、児童の将来に何が役に立つか5項目で質問した。「役に立たない」という項目の回答を選択した大学生、保護

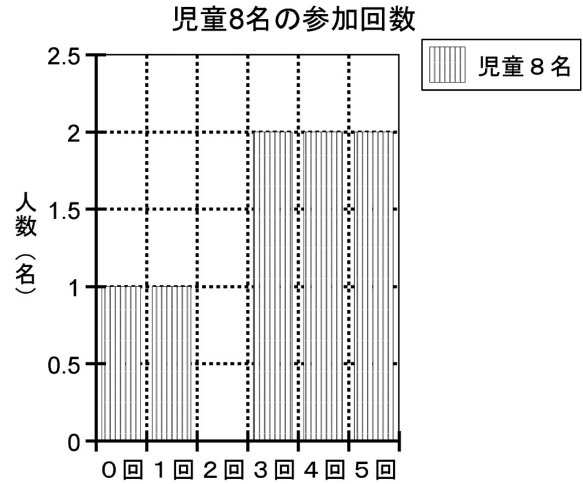


Fig. 18 児童の参加回数

者はいなかった。

どちらも将来の余暇活動に役立つと回答した人数が8割以上で一番多かったが、2番目に多かったのは、大学生が将来の就労(2割)、保護者が社会生活(7割)で回答が分かれた。

大学生自身が余暇活動としてサッカーを楽しんでいる現状からの感想と考えられる。

一方、常に児童を見ている保護者は、キッズサッカーが将来の社会生活に役に立つと考えていた。

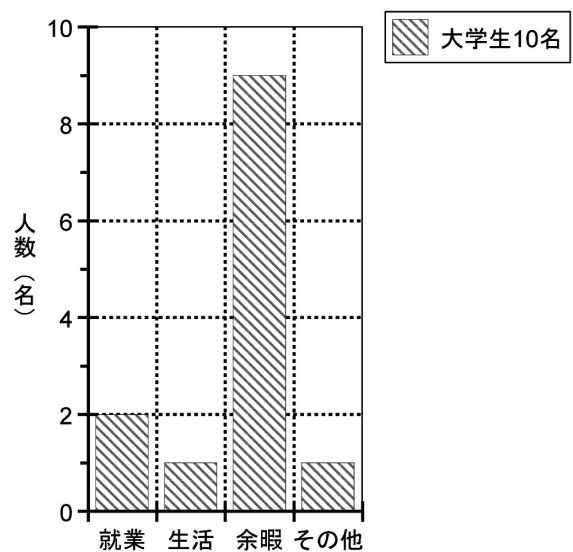


Fig. 19 将来何に役立つかの大学生回答

③ キッズサッカーのイメージについて

Table 12は、キッズサッカーに対する大学生や保護者のイメージである。

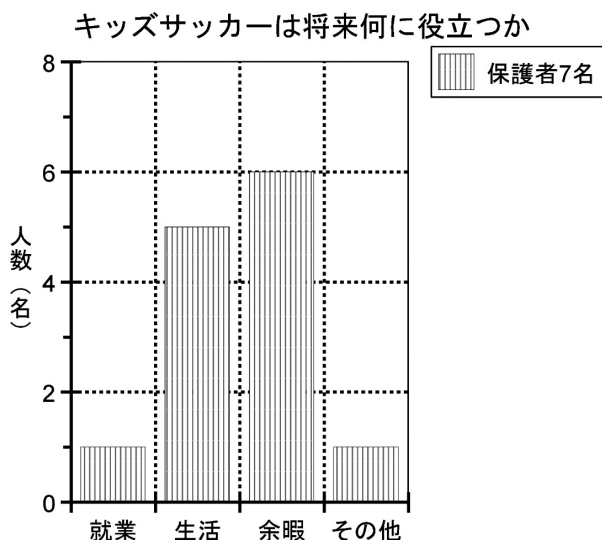


Fig. 20 将来何に役立つかの保護者回答

大学生は「楽しく(4名)」、「交流や触れ合いの場(4名)」、「仲良く(2名)」など、全員が好意的に児童の活動を捉えていた。保護者も好意的ながら、笑顔で元気で駆け回り、コミュニケーションや体力がつく、パスやシュートをしてゲームができるなど、技能面の変容も捉えているようだった。

④ 「4領域」や「生きる力」に関する項目について

Table 13は、キッズサッカーが将来の就業や社会生活にどのように役立つと感じてあるかについての回答である。

大学生は「A4 友だちと仲良く遊ぶ」

(10名)、「A3 友だちと協力して、学習や活動に取り組む」「体力がつく」「意欲や積極さにつながる」(9名)、「A1 挨拶や返事をする」「C3 時間や決まりを守り、作業(キッズサッカー)の手順が分かる」「D6 自分の仕事(キッズサッカー)を最後までやり通そうとする」「余暇の充実につながる」(7名)で、18項目中8項目が7名以上(70%以上)で役立つと回答した。

大学生は、キッズサッカーを体験することで、児童が「人間関係形成能力」を中心としながら、「将来設計能力」や「意志決定能力」の一部を身に付け、さらに体力をつけ将来の余暇活動に役に立つと前向きに考えながら、児童の支援をしていることが推測された。

一方、保護者は「A4 友だちと仲良く遊ぶ」(5名)、「A3 友だちと協力して、学習や活動に取り組む」(5名)、「体力がつく」(5名)、「余暇の充実につながる」(6名)で、18項目中4項目が5名以上(70%以上)だった。

保護者は、キッズサッカーを体験することで、児童が「人間関係形成能力」の一部を向上させ、さらに体力をつけ将来の余暇活動に役に立つと考えていることが推測された。

Table 12 大学生と保護者のキッズサッカーのイメージについて(自由記述)

大学生のイメージ	保護者のイメージ
<ul style="list-style-type: none"> みんな元気で楽しそうにサッカーをしているなと思いました。 子どもたちとふれ合う機会も少ないので楽しい。 大学生と子どもたちが交流できる。 サッカーを通して、みんなが仲良くなる場。 子どもたちと仲良くサッカーするイメージ。 自分たちも楽しんでできています。 子どもたちも楽しくやっているようなのでいいと思う。 1回もやったことがないけど楽しそう。 子どもたちとふれ合えて充実している。 子どもたちと一緒にサッカーをやる。 	<ul style="list-style-type: none"> 元気で駆け回って楽しめる。 サッカーを通してコミュニケーションの力がつき、体力もつく。 友だちと競い合って、喜びを得る。 みんな笑顔。 準備から片付けまでできる。 友だちとパスやシュートをし試合をする。 無記入1名。

Table 13 キッズサッカーは、子どもたちにとって、将来の就業や社会生活にどのように
 役立つと大学生と保護者は感じてあるか。(※ 複数回答可)

	4領域8能力や生きる力等に関する項目	大学生の人数		保護者の人数	
		人数 (名)	割合 (%)	人数 (名)	割合 (%)
①	自分が好きなこと、嫌いなことを表現する	3	30%	2	29%
②	友だちと仲良く遊ぶ	10	※ 100%	5	※ 71%
③	自分の良いところを見つける	4	40%	2	29%
④	友だちのよいところを認める	6	60%	2	29%
⑤	友だちと協力して、学習や活動に取り組む	9	※ 90%	5	※ 71%
⑥	あいさつや返事をする	7	※ 70%	4	57%
⑦	分からないことを調べたり、聞くことができる	4	40%	2	29%
⑧	身近で働く（活動する）人々の様子に興味・関心をもつ	6	60%	3	43%
⑨	家族の存在や家庭での役割に興味をもつ	3	30%	3	43%
⑩	家の手伝いや割り当てられた仕事、役割ができるようになる	6	60%	2	29%
⑪	作業（またはキッズサッカーの）準備や片付けをする	6	60%	3	43%
⑫	時間や決まりを守り、作業（キッズサッカー）の手順が分かる	7	※ 70%	4	57%
⑬	自分の好きなものを選ぶことができる	6	60%	3	43%
⑭	自分のことは自分で行おうとする	2	20%	1	14%
⑮	自分の仕事（キッズサッカー）を最後までやり通そうとする	7	※ 70%	3	42%
⑯	体力がつく	9	※ 90%	5	※ 71%
⑰	余暇の充実につながる	7	※ 70%	6	※ 86%
⑱	意欲や積極さにつながる	9	※ 90%	4	57%

※ 項目②、⑤、⑯、⑰は、大学生と保護者とも70%以上である。

V 考察

1 キッズサッカーに関するキャリア発達段階と内容を明確化することについて（目的1）

キャリア発達に係る「4領域」の項目が、「学校外の地域教育」のキッズサッカーにも深く関わっていることが分かった。特に現在教育に求められている「生きる力」の育成の中で、「健やかな体」と「豊かな心」に、キッズサッカーは大きく関わっていると考えられた。

また、2011年度はキッズサッカーの技能向上に主に目を向けていたが、将来を見据えたキャリア教育の視点で見直したとき、関連する「4領域」を念頭に、「大学生との会話は人間関係能力の育成の場面」、「児童が自主的なポジション変更は意志決定能力の場面」などと支援者が意識できた。それを生かして、2012年度は児童に具体的な声かけや支援ができるようになった。

2 「キッズサッカーにおけるキャリア教育のねらい一覧表(案)」を作成することについて（目的2）

キッズサッカーに関連するキャリア発達段階と内容を明確化することで、Table 10の「キッズサッカーでのキャリア教育のねらい一覧表(案)」を作成できた。

その成果として、2012年はキッズサッカーをキャリア教育の視点から見れたことで、児童同士や児童と大学生の交流や活動を「人間関係形成能力」として捉えことができるようになったことは大きい。また、アンケート結果から、児童の将来の就業や社会生活に必要な体力や余暇活動にむすびつくことを大学生や保護者が考えながら支援していることが確認できた。

また、「ねらい一覧表」は、支援のねらいとともに、指導・支援の評価としても使用で

きることが体験できた。

巨視的に見たとき、熊本県立荒尾支援学校では、「キャリア教育発達段階・内容表（試案）」（国立特別支援教育総合研究所、2008年）を参考に、一般就労から福祉就労、さらに家庭や地域での就労も視野に入れた包括的な内容の発達段階表を作成している（島村ら、2012年）。そこでは、これまでの「4領域」を「職業的自立につながるキャリア」とし、新たに「社会的自立につながる社会的キャリア（地域の資源を活用する能力、余暇を過ごす能力）」を設けている。キッズサッカーは、まさに「社会的自立につながる社会的キャリア」の範疇に入ると考えられる。さらに島村らは、地域の中で役割を果たしていく力の育成に注目している。すべての児童生徒が一般就労、福祉就労ばかりでなく、家庭や地域での生活も考慮されている点は特記すべきことと考える。今後、「ねらい一覧表」の見直しの参考にしていきたい。

なお、キッズサッカーにおける「4領域」の相互の関係についても考察する。

Table 14の表は、東京都教育委員会の報告書（2008）を参考にして、著者がキッズサッカーの「4領域」の関係を作成したものである。表からも明らかのように、「4領域」は各々が必ずしも独立した内容ばかりではなく、活動によっては、関連して「4領域」が複数含まれる場合もある。

このことから、今後、他の教育支援の場で同様なめあての一覧表を作成する時は、「4領域」の関連性を把握する必要がある。

また、東京都は都内特別支援学校進路指導担当者を対象に、就労の決め手となった能力についても調査している（2008）。その結果を見ると、「人間関係形成能力」は60%で群を抜いていた。次に「将来設計能力」、「意志決定能力」、「情報活用能力」の順であった。さらに、職場定着に必要なことの調査では、「良好な人間関係」があげられていた。以上

Table 14 「4領域」の相互の関連性について

	キッズサッカーの活動内容の例	「4領域」			
		人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意志決定能力
1	キッズサッカーのマナーや大学生との接し方を学ぶ。	◎	○		
2	学校とキッズサッカーとの場の違いについて学ぶ。	○	◎		
3	キッズサッカーの目標を設定し、交通経路、持ち物・服装を確認する。		○		◎
4	地域でサッカーチームを利用するために、情報収集をする。		◎	○	
5	支援者や大学生、他の保護者の立場や役割を理解し、話す内容や言葉づかいについて理解する。	○		◎	

のことから、他の学習場面で、キッズサッカーと同様な「ねらい一覧表」を作成する時は、まず「人間関係形成能力」の項目を重視し、次に「将来設計能力」、「意志決定能力」、「情報活用能力」の順で活動内容を作成していくことも実用的で有効な方法と考える。

3 キャリア教育の視点からキッズサッカーを実施し、児童の変容を明らかにする（目的3）

「4領域」の観点から支援を行い、参加児童全員が変容を見せてくれた。各児童の技能の向上だけでなく、将来を見据えたキャリア教育の視点を取り入れたことで、余暇活動以外の将来の社会生活や就業にも目を向けることができるようになった。

久野ら（2012）は、学校教育の中で、キャリア発達段階やキャリア教育に則り指導・支援することで、児童生徒に変容が見られたことを明らかにしている。本研究でも同様に、学校外の地域教育であるキッズサッカーにおいても、参加児童は技能の向上と「4領域」での変容を見せてくれた。

一方、梅永（2012）は「対人関係」「コミュニケーション」「想像力」の3つ組の障害がある自閉症スペクトラムにとって、キャリア教育の「4領域」は自閉症スペクトラムの児童

にとって身につけることは難しいとしている。さらに、8割以上の離職者は、『「ソフトスキル」の「日常生活能力挨拶、協調性、表情(明るさ)などの対人関係能力、コミュニケーション能力、休憩時間の過ごし方などの余暇活動』に原因があるとしている。さらに、『就労支援の大きなポイントは、「適切なジョブマッチング」と「職場の同僚・上司の理解」が必須』としている。

キッズサッカーにおいても、梅永の所見を参考にしながら、発達障害児の特性を配慮して支援を工夫していきたい。

次に、現在、健常児の中でサッカーをしているA児について述べる。著者は、2012年度九州心理学会のシンポジウムに参加し、鹿児島発達障害児親の会の保護者から話題提供を聴いた。保護者の発達障害児のお子さんが、入部した野球部での健常児との様々な係わりとエピソード、そして周囲の人々から温かく配慮された事柄を報告された。その保護者が一番嬉しかったのは、『「〇〇君は大丈夫だから。」と支援者や他の保護者から言われたことで、安心できた』ということばが印象に残った。

A児も、発達障害の特性から小学校サッカー部では、健常児との係わりの中で様々な思いをしているようである。A児が、困難を乗り越えられるのは、「サッカーが好き」というA児の気持ちである。A児の変容を振り返った時、入学後に著者と数名でキッズサッカーを始め、翌年大学生から1年間支援してもらうことができ、2012年は小学校とサッカークラブの2カ所で週4日サッカーを経験する状況にまでなっている。

一方、保護者は予想ができなかった状況もあるということだった。キャリア教育を進める上では、本人だけでなく、様々な思いをされている家族への的確な支援も重要と考える。言葉だけの「大丈夫だから」ではなく、梅永の所見も踏まえ発達障害児の特性を十分に配

慮した「大丈夫な状況づくり」がキャリア教育には必要と考える。

4 キャリア教育の視点からキッズサッカーを見直す(目的4)

2012年は、キッズサッカーの取組の内容を一部改善し、児童の変容を見ることができた。

キッズサッカーの「めあて一覧表」をみると、児童の技能の向上と「4領域」は、関連する内容も少なくない。そのため、キッズサッカーの技能の向上にも、継続して働きかけていく必要がある。

キャリア発達の評価については、菊地らは「行動観察などの記述的な記録をもとにした質的評価」で行った(2012年)。



Fig. 21 iPadによる撮影で振り返る

キッズサッカーについても、数値評価のために数値評価のために25mドリブルの計時を行っているが、さらに行動観察やデジカメによる記録、iPadによる記録で活動を振り返ることができた。特にiPadは画面が大きく、瞬時に振り返りができた。今後も、iPadを積極的に活用し、大学生や保護者と一緒になって活動を検討し改善していきたい。

5 発達障害児のキッズサッカーにおける不器用さ・困難さを明らかにする(目的5)

山下ら(2010)の研究により、発達障害児はヘディングやボールとの距離感などサッカーにおける不器用さ・困難さが明らかになった。

本校でも不器用さの類似した事例として、準備運動のラジオ体操の曲に合わせた協応動作が苦手な児童がいる。しかし、著者が肉声でゆっくり手本を示すと体操を模倣はできたり、ミニゲームでは不器用さが目立ったりしない。

その理由として、岩永(2012)が指摘する

ように、本校のキッズサッカーは、ボールを運ぶ(ドリブル)ことが主な単純な運動と考えられる。

なお、「個別支援グループ」から「ミニゲーム参加グループ」に移動したC児がいることから、運動面で本校のキッズサッカーは比較的単純な運動と考えられる。そのため、継続することで運動の困難さはある程度軽減されると推測される。また、本校の「個別支援グループ」の実態から、ボールを運ぶ(ドリブル)技能が困難と感じた。技能の変容のためには、まず大学生と良好な人間関係を築き、常に励ましの中で個別の支援を受けること、困難さがありながらも最終的にはミニゲームに参加することで楽しさを味わうことができることが必要と感じる。

VI 考察のまとめ

21世紀の知識基盤社会の中で「生きる力」を育む教育は、発達障害児の児童生徒にも重要である。今回、キャリア教育の視点でキッズサッカーに取り組んできた。キッズサッカーは「生きる力」の豊かな心と健やかな体に関わっていて、将来の職業生活や社会生活にも関わっていると実感している。

暑い夏や寒い冬にもかかわらず、参加する児童は楽しさを味わい、大学生と保護者は児童の楽しい様子と心身の変容を感じることができた。季節に関係なく、大学生、参加児童、保護者が楽しい時間を共有できた有意義な活動だった。

また、Fig. 22～ Fig. 25は、ミニゲームの一場面である。攻守の切り替えが素早くなったり、激しくボールを奪い合う場面が増えた。しかし、不思議とプレー中のケガや事故、ラフなプレーはなかった。参加児童の優しい性格が反映されていると感じた。



Fig. 22 激しいボール奪取



Fig. 23 接近したプレー



Fig. 24 急な攻守の切り替え



Fig. 25 技能・得点力向上

学校教育では、小中高一貫した特別支援教育の取組が重要であるが、この実践研究を通して、キャリア教育の視点を教職員全員が持って教育活動を行えば、学校としても協働で共通した支援が可能になると再認識できた。

最後に、これまで著者が感銘を受けた数多くの言葉の中で3つを選びたい。

一つ目、初めて参観したA児の父親の言葉「(A児のきょうだい児2名もミニゲームに参加している様子を見て) 幸せな時間を過ごさせていただきました」。

二つ目、「今日、一番感動したのはD君(※通常は「個別練習グループ」に所属)がミニゲームに参加できたこと」と、D児の母親に声をはずませ言ってくれた保護者。

三つ目。「今日は、何人支援の大学生が必要ですか?」といつも尋ねてくれる大学生たち。

VII 今後の課題

キッズサッカーの内容は、2012年も学生や保護者のアンケート、「4領域」の観点から、PDCAサイクルで改善し実施してきた。今後、保護者主催で内容や実施等について検討される予定である。

謝辞

2011～2012年度に快く子どもたちのサッカーの支援をして頂いた佐賀大学サッカー同好会「FC SUZUKA」の学生の皆様に、心から厚くお礼を申し上げます。

キッズサッカーに参加して頂いた子どもたちや保護者の皆様、きょうだい児をはじめご家族の方々に感謝を申し上げます。

キッズサッカーの実施に、当初から熱心にご協力を頂いた浦川和昭副校長をはじめ校内の教職員の皆様に謝意を表します。

ご指導頂きました文化教育学部の教職員の皆様にも心から感謝を申し上げます。

参考文献

岩永竜一郎 (2010) 自閉症スペクトラムの子どもへの感覚・運動アプローチ入門. 東京書籍, 52.

梅永雄二 (2012) 自閉症スペクトラム児童生徒の就労支援～キャリア教育の視点から～. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, P1-K-2.

菊地一文 (2011) 第2章キャリア発達段階・内容表(試案)及び観点解説の改訂. 国立特別支援教育総合研究所編著. 特別支援教育のためのキャリア教育ガイドブック. キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善、個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために, ジアース教育新社, 49.

菊地一文・原智彦・森脇勤・松浦孝寿・木村宣孝 (2012) 特別支援教育におけるキャリア教育(4)ー キャリア教育の評価をどのように捉え、どのように進めていくかー. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, 自主シンポジウム64.

久野建夫・江原直樹・本井健太・加藤公史・菊

地一文 (2012) 12年間の連続した学びを支えるキャリア教育. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, 自主シンポジウム4.

島村武・西野晃子・楠田未来・瀬戸理・多野肇・吉田安世・松本章子・上村泉・長田哲也・村田昌士 (2012) 重度重複障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, P3-0-7.

東京都教育委員会 (2008) 平成20年度障害のある児童・生徒の自立と社会参加を目指した指導の研究・開発事業(キャリア教育推進委員会)報告書, 1-27.

中山忠彦・中井聖 (2012) 幼児の発育発達特性や社会性の獲得に配慮したサッカー教室が幼児の心理状況や体力に及ぼす効果. 近畿医療福祉大学紀要, 13(1), 23-29.

畠山富士雄・久野建夫 (2012) 特別支援学校小学部における土曜日キッズサッカーの試みー大学生サッカーチームの支援を得た取り組みー. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, P2-D-9.

畠山富士雄・久野建夫 (2013) みんな笑顔・土曜日キッズサッカー～大学生サッカーチームの支援を得た試み～. 特別支援教育の実践情報, 2013年2-3号, 明治図書, 48.

畠山富士雄・中村寛志・久野建夫 (2012) 附属特別支援学校小学部の土曜日キッズサッカーの試み (I). 佐賀大学教育実践研究, 第28号, 127-144.

松矢勝宏 (2010) 第1章キャリア教育の接近. 全国特別支援学校知的障害教育校長会編著 (2010) 特別支援教育のためのキャリア教育の手引き. 特別支援教育とキャリア発達, ジ

アース教育新社, 14.

文部科学省 (2011) 第1節キャリア教育の必要性と意義. 高等学校キャリア教育の手引き, 14-24.

山下揺介・田部絢子・石川衣紀・上好功・至田精一、高橋智(2010)発達障害の本人調査からみた発達障害者が有するスポーツの困難・ニーズ. 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 61(1)319-357.

渡部鮎美・白土久江・櫻井幸子・新井英靖 (2012) 特別支援教育(知的障害)のキャリア教育と授業づくり2. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, P4-E-1.

